

西国分Ⅱ遺跡

株式会社ゴトーキン店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要

1993. 12

財団法人 和歌山県文化財センター

例 言

- 1 本書は、那賀郡岩出町西国分・岡田に所在する西国分II遺跡の埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。調査地は、岡田230-1に位置する。
- 2 発掘調査は、(株)ゴトーキン店舗建設に伴うもので、(株)ゴトーキンの委託を受け、和歌山県教育委員会の指導のもとに(財)和歌山県文化財センターが実施した。
- 3 発掘調査・本書の作成は、(財)和歌山県文化財センター 土井孝之が担当した。
- 4 調査・整理作業で作成した図面・写真および野帳等の記録類は(財)和歌山県文化財センターが、出土遺物は和歌山県教育委員会が各々保管している。
- 5 当発掘調査に伴う測量基準点設置は、南紀航空株式会社に委託して行なった。
- 6 発掘調査ならびに本書で使用した標高は東京湾標準潮位(T.P.+)の数値で、北方位Nは国土座標第VI系の座標北を示す。
- 7 土層の色調は、日本色研事業株式会社発行『新版標準土色帳』(1993年版)に準拠した。
- 8 本書で使用した遺構の略号は、土坑-SK、溝-SD、柱穴状遺構-Pである。
- 9 発掘調査・整理業務に使用した遺跡のコード番号は、93-11・013(1993年度一岩出町・西国分II遺跡)である。
- 10 本書で使用した遺物番号は、本文・図版すべてに共通する。

本文目次

1 調査の経緯	1
2 位置と歴史的環境	1
3 調査の成果	2
(1)調査の方法	2
(2)検出遺構と出土遺物	2
4 まとめ	3

図版目次

第1図 遺跡位置図	写真図版一 調査地遠景(南西から)
第2図 調査区位置図	調査区遺構全景(東から)
第3図 調査遺構全体図	写真図版二 方形周溝墓1(北西から)
第4図 溝SD3南壁土層図	溝SD3南壁土層(北から)
第5図 土坑SK4実測図	土坑SK18遺物出土状況(東から)
第6図 出土遺物実測図	土坑SK4(北東から)

1 調査の経緯

西国分II遺跡は、昭和50年代前半の道路工事に際して多量の遺物が出土したり、遺物の表面採集によって遺跡の範囲が推定されていた。相前後する国道24号線岩出バイパスの開通に伴い、遺跡内での開発事業が目立って増加してきている。

今回の調査地は昭和62年度(1987年)に約3,600㎡に対して造成工事の計画があり、擁壁で掘削される部分を中心に「日」の字形に試掘溝を設定した調査が県教育委員会によって行なわれていた箇所である。試掘溝内において3箇所で溝が確認され、南北方向に延びる溝が存在するものと考えられた。遺物は縄文時代の石鏃、奈良時代の須恵器・土師器、鎌倉時代の瓦器などかなりの量が出土している。調査地は、その時点では造成工事を行なっただけで、建物等の構造物を建てるまでには至らなかった。

平成5年度に至って、調査地を中心とした約8,000㎡の範囲に対し、ホームセンター店舗および駐車場の建設計画があり、それに先立って再度試掘調査を実施する運びとなった。試掘調査は、本年の6月に県教育委員会によって行なわれ、構造物の立つ範囲約2,500㎡に対して6箇所の試掘坑が設定された。その内2箇所の試掘坑において柱穴状の遺構が確認された。同年7月12日から8月4日まで、県教育委員会の指示によって開発対象地の一部について調査を行なった。

2 位置と歴史的環境(第1図)

西国分II遺跡(13)は和歌山県の北部、紀ノ川中流域の北岸那賀郡岩出町西国分および岡田地内に所在する。この付近は和泉山脈の山麓から南の紀ノ川に向かって流れる小河川の作りだした複合扇状地が紀ノ川本流によって削られた二段の河岸段丘となっており、遺跡はこのうちの低位段丘面、標高約30～34mに位置している。

西国分II遺跡は過去に数次の調査が実施されており、旧石器時代から室町時代にかけて断続的に続いてきている複合遺跡と理解されている。中でも、昭和55年度・平成2年度の調査地点では、大規模な倉庫を含めた奈良時代の掘立柱建物が数多く検出されており、遺跡の主体となるものと考えられている。

その他、低位段丘上には西国分II遺跡と同様に那賀郡衙跡に比定できる岡田遺跡(9)が存在しており、春日川を隔てて東側には八幡塚古墳(7)・三昧塚古墳群(6)など10基あまりの古墳が点在している。高位の段丘上には、紀伊国分寺跡(打田町10)・西国分廃寺(岩出町10)・西国分I遺跡(11)・土器田遺跡(12)などが所在しており、紀ノ川中流域でもっとも遺跡の集中する地域であり、7世紀後半から古代那賀郡の一大中心地を構成する遺跡群と考えられる。

3 調査の成果

(1) 調査の方法(第2図)

今回の調査範囲は、前述した開発対象面積約8,000㎡の内の構造物の立つ南寄りに設定された範囲約295㎡のみである。調査地付近は従来、遺跡の中心から離れた範囲に当たると考えられていた場所である。調査地は昭和62年に厚さ1.3mほどの盛土が置かれた場所であり、今回の調査に伴って盛土・耕作土・床土および旧耕作土の大部分を重機により掘削した。その後、旧耕作土の一部と以下を人力により掘削し作業を進めた。

遺構検出面は、水田の畦畔が南北に横切り東側が一段低い(5～10cm)状況にあり、鎌倉時代以後の土地開発による削平が著しいものと考えられるが、南側に向かって若干低くなる傾向にある。また、ベース土は水田の畦畔を境にして、東側が10Y R 6/8 明黄褐シルト+N 7/0 灰白シルト(粘質土)、西側が礫を含む細砂層になる。

なお、開発工事が調査と同時に進められており、工事により深掘される怖れのある今回の造成工事に伴う新たな擁壁部分・防火水槽・浄化水槽・建物基礎部分などは県教育委員会による立会い調査が行なわれた。

(2) 検出遺構と出土遺物(第3～6図、写真図版一・二)

検出遺構は、弥生時代の溝、布留式併行期の土坑などが中心となり、奈良時代以後の土坑を数基検出した。遺物は依存状態が悪く、実測できたものは数少ない。旧耕作土からは、奈良時代の土師器・須恵器・瓦、鎌倉時代の土師器・瓦器が主体をなして出土している。

土坑 S K 4 (第5図、写真図版二) 長軸3.8m・短軸3.0m・深さ47cmの不整形な二段掘りの土坑である。基底部に10～30cm大の川原石が数個置かれていた。埋土上層には、少量の炭粒を含む。遺物は埋土上層から布留式併行期の甕の小片が数点出土している。

土坑 S K 7 長軸2.8m以上・短軸2.8m・深さ30cmの不整形な土坑である。下層は土坑 S K 4に類似する埋土(5 Y R 4/3～4/4にぶい赤褐色シルト)である。遺物は埋土下層から弥生土器と考えられる小片が数点出土している。

土坑 S K 8 長軸1.2m以上・短軸0.6m・深さ20cmの歪な長方形の土坑である。遺物は出土していない。

土坑 S K 9 長軸1.4m・短軸0.4m・深さ3cmの楕円形の土坑である。遺物は土師器の小片が出土している。

土坑 S K 10 長軸1.0m・短軸0.4m・深さ5cmの楕円形の土坑である。

土坑 S K 15 長軸1.0m・短軸0.6m・深さ32cmの不整形な土坑である。埋土は7.5 Y R 5/8 明褐色細砂で、1～5cm大の礫を少量含む。遺物は出土していない。

土坑 S K 17 調査区の北西隅に位置する。長軸2.2m以上・短軸0.6m以上・深さ5cmの土坑

で、大半が調査区外にかかるものと考えられる。遺物は布留式併行期の甕の小片、奈良時代の土師器(6)・須恵器が少量出土している。

土坑SK18(写真図版二) 本来、溝SD3の埋土上面から掘り込まれたと考えられる土坑であるが、溝SD3の底面で検出する結果となった。検出規模は、直径0.6m・深さ5cmを測る。遺物は土坑の底から10~20cm上に集中して、弥生時代後期の脚台付細頸壺・壺(5)などが出土している。遺物は遺存状態が極めて悪かった。

溝SD2 溝は東側で緩く折れ曲がり、北西方向に延びる。コーナー部分が最も深く、幅1.2~2.2m・深さ20~37cmを測り、延長10m分を検出した。遺物は埋土中層から弥生時代後期の鉢底部(3)、下層から弥生時代中期と考えられる底部の破片(4)が出土している。

溝SD3(第4図、写真図版二) 溝は北側で緩く折れ曲がり、南東方向に少し延びる傾向にある。南端が最も深くなり一見土坑状を呈しているが、緩く折れ曲がり南東方向に延びる傾向にある。幅0.8~1.8m・深さ14~43cmを測り、延長11m分を検出した。埋土は土質に違いがあるが溝SD2と酷似し、対象位置にあって一辺約8.4m(溝の内側)の方形区画を成すものと考えられる。遺物は埋土上層(第1・2層)から布留式併行期の甕、奈良時代の土師器・須恵器、鎌倉時代の瓦器・土釜が、下層(第3層)と北側から弥生時代中期の壺(1)・甕・高坏(2)が出土している。

溝SD5 溝は調査区の北東隅から緩く折れ曲がるような状況で南西方向に延びる。埋土は溝SD2・SD3と酷似している。遺物は出土していない。北端の土坑状の掘り込みは、溝SD5によって削平されており、埋土に多量の炭粒を含んでいた。

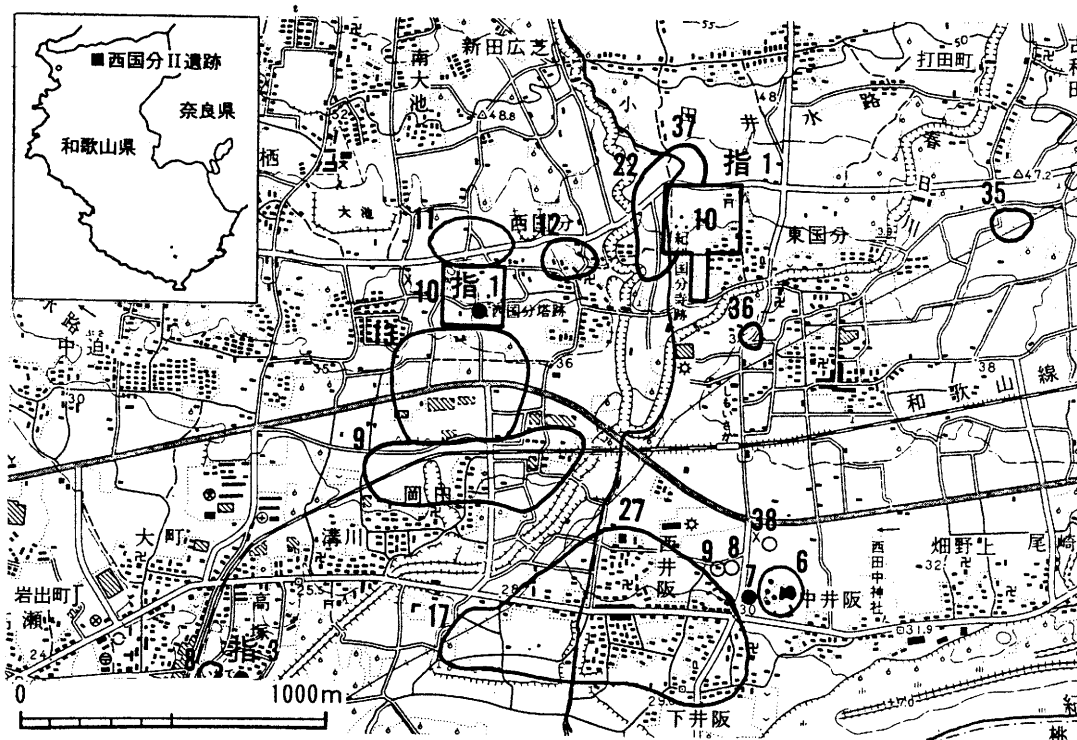
溝SD6 溝の一部を検出したに留まるが、埋土と位置関係から溝SD5と対象位置にあって一辺7m前後(溝の内側)の方形の区画を成すものと考えられる。

溝SD11 幅0.4m・深さ5cmを測り、延長6.4m分を検出した。遺物から鎌倉時代以後と考えられる。

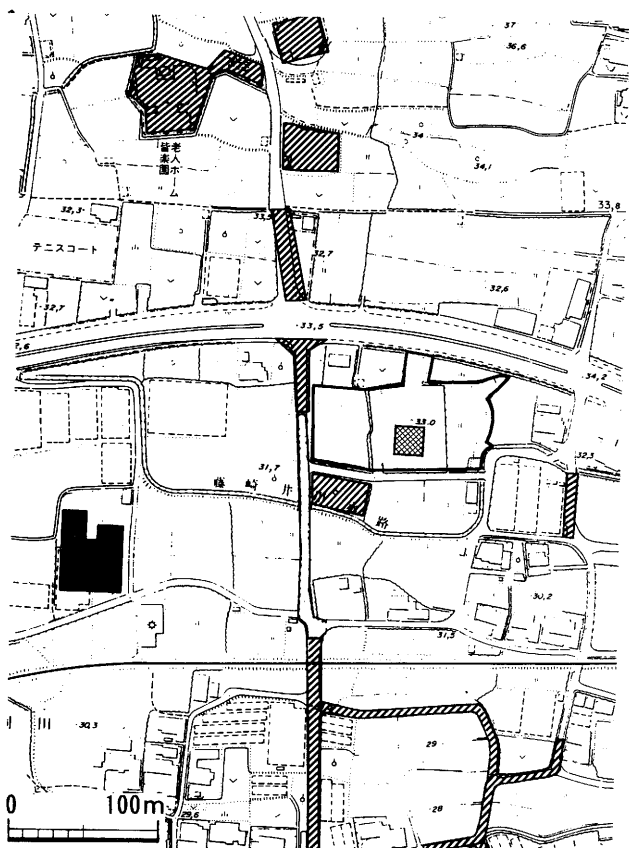
柱穴状遺構Pit 土質の僅かな違いで柱穴状遺構と考え作業を進めたが、単なる土質の違いと旧耕作土が部分的に残っていたに過ぎない。

4 まとめ

西側に位置する昭和55年度・平成2年度の調査地点では、奈良時代の掘立柱建物が数多く検出されていたが、今回の調査区で奈良時代の遺構はSK17のみであった。このことから当地点は、奈良時代の集落の中心部から外れた場所と考えられる。しかし、溝SD2と溝SD3、溝SD5と溝SD6が各々一定の方形区画を呈することから、弥生時代中期後半の陸橋部をもつ方形周溝墓と考えられ、当遺跡を考えるに当たって新たな資料を提供したものである。



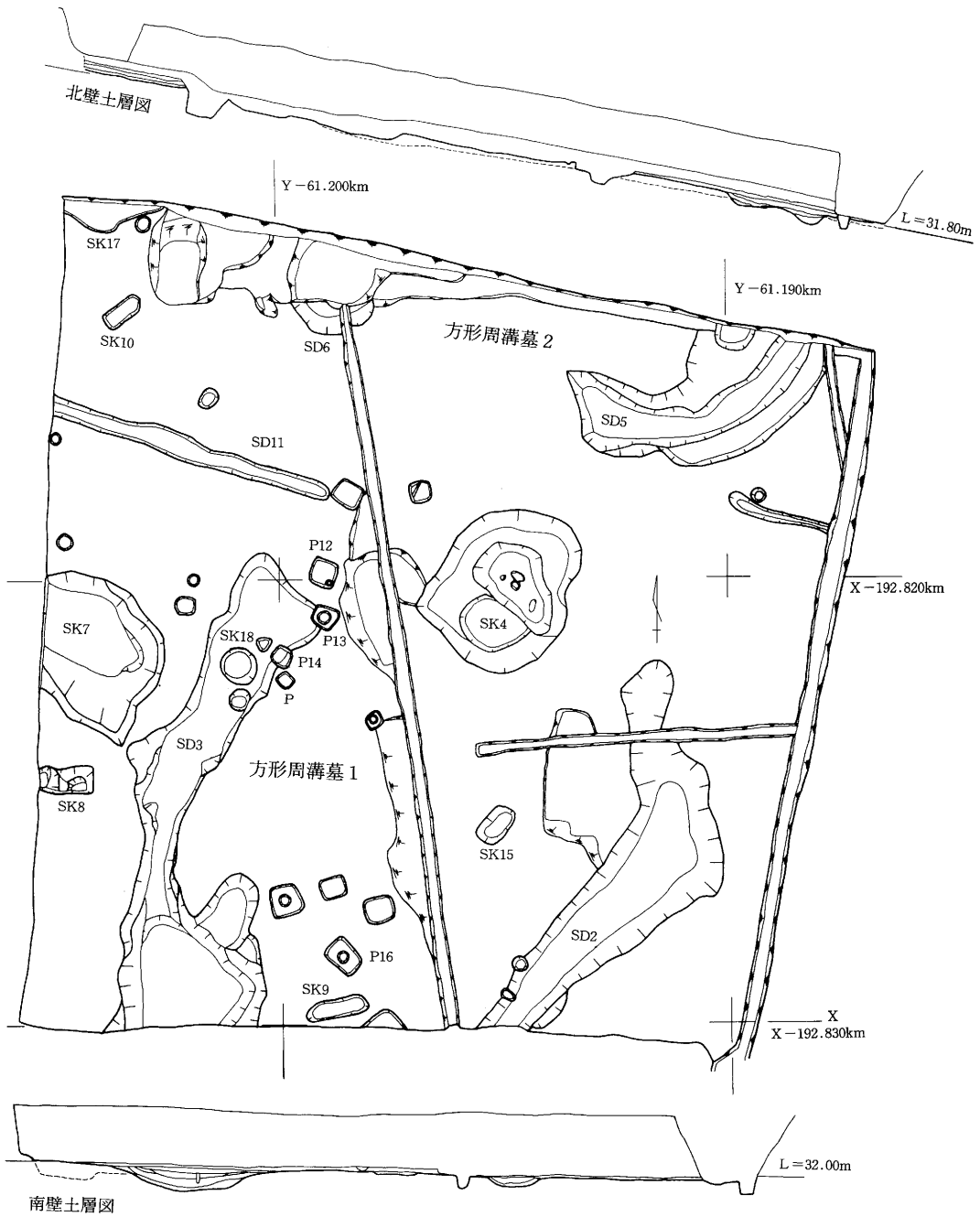
第1図 遺跡位置図



- 岩出町
- 8 高塚遺跡
 - 9 岡田遺跡
 - 10 西国分廃寺
 - 11 西国分I遺跡
 - 12 土器田遺跡
 - 13 西国分II遺跡
 - 17 岡田II遺跡
 - 22 東国分II遺跡
- 打田町
- 6 三味塚古墳群
 - 7 八幡塚古墳
 - 8 じょう穴古墳
 - 9 無名塚古墳
 - 10 紀伊国分寺跡
 - 27 岡田II遺跡
 - 35 古和田遺跡
 - 36 東国分I遺跡
 - 37 東国分II遺跡
 - 38 霧塚古墳

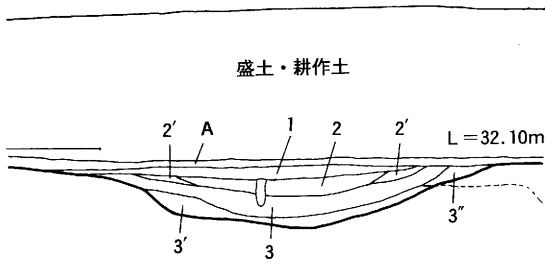
- 今回の調査地区
- 既往の調査対象地区
- 既往の調査対象地区

第2図 調査区位置図(『西国分II遺跡発掘調査概報』1990を転写改変)



0 5 m

第 3 図 調査遺構全体図

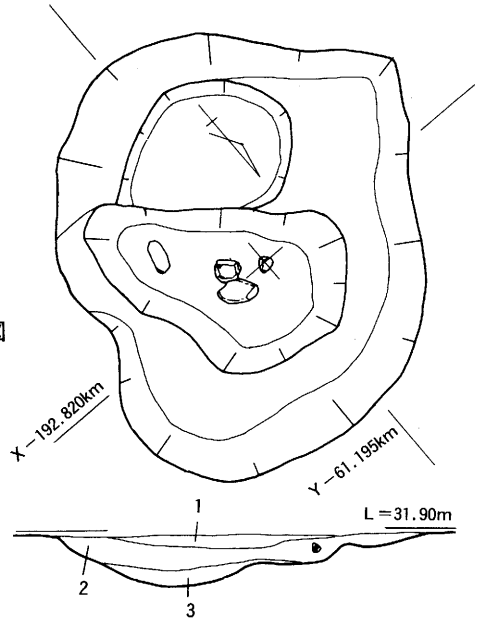


A 旧耕作土
7.5Y 6/1 灰 細砂



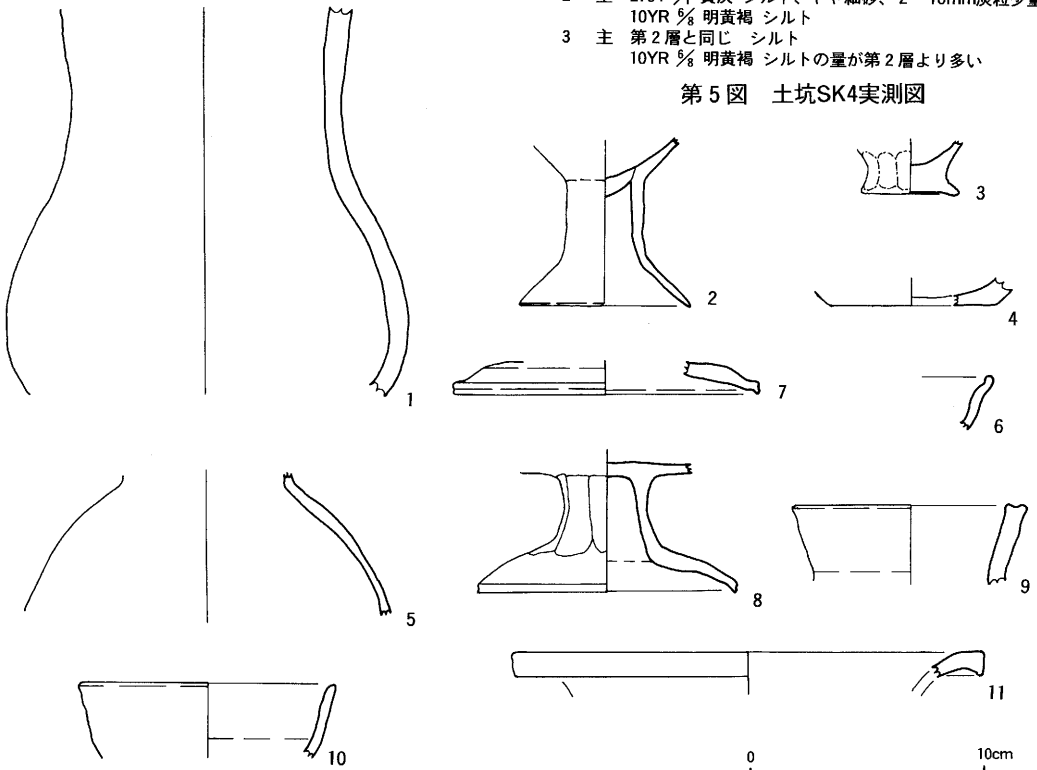
第4図 溝SD3南壁土層図

- 1 主 10YR 5/3 ~ 5/4 にぶい黄褐 細砂 1~3cm大の礫少量含む
(5YR 5/3 ~ 5/4 にぶい赤褐) A層に類似する
- 2 5YR 3/3 ~ 3/4 暗赤褐 細砂、粗砂を含む
- 2' 主 5YR 4/3 ~ 4/4 にぶい赤褐 細砂
10YR 5/3 ~ 5/4 にぶい黄褐 細砂
- 3 主 7.5YR 5/6 ~ 5/8 明褐 シルト、細砂、粗砂を含む
2.5Y 5/1 黄灰 シルト
- 3' 3層に類似し、砂礫を含まない
- 3'' 主 3層と逆転する 灰色系



- 1 主 5YR 5/3 にぶい赤褐 シルト 2~10mm炭粒中量
10YR 5/3 ~ 5/3 にぶい黄褐 シルト
- 2 主 2.5Y 5/1 黄灰 シルト、やや細砂、2~10mm炭粒少量
10YR 5/8 明黄褐 シルト
- 3 主 第2層と同じ シルト
10YR 5/8 明黄褐 シルトの量が第2層より多い

第5図 土坑SK4実測図

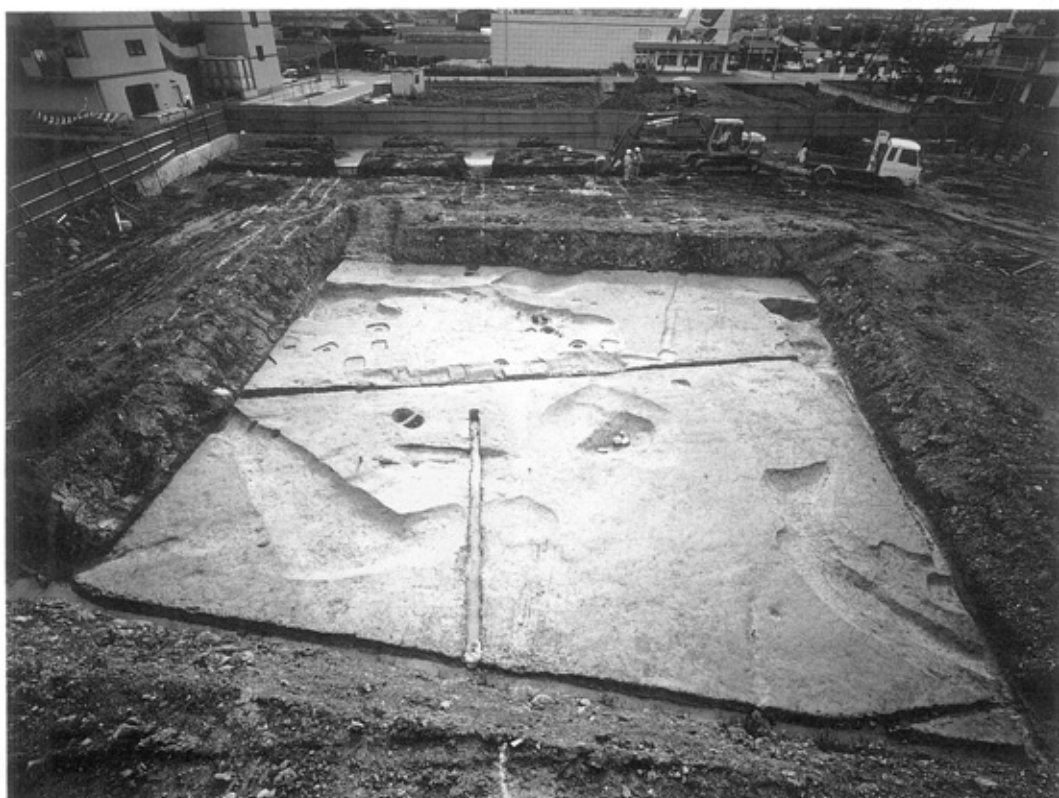


第6図 出土遺物実測図

1・2 SD3、3・4 SD2、5 SK18、6 SK17、7~9 A層、10・11 工事排土



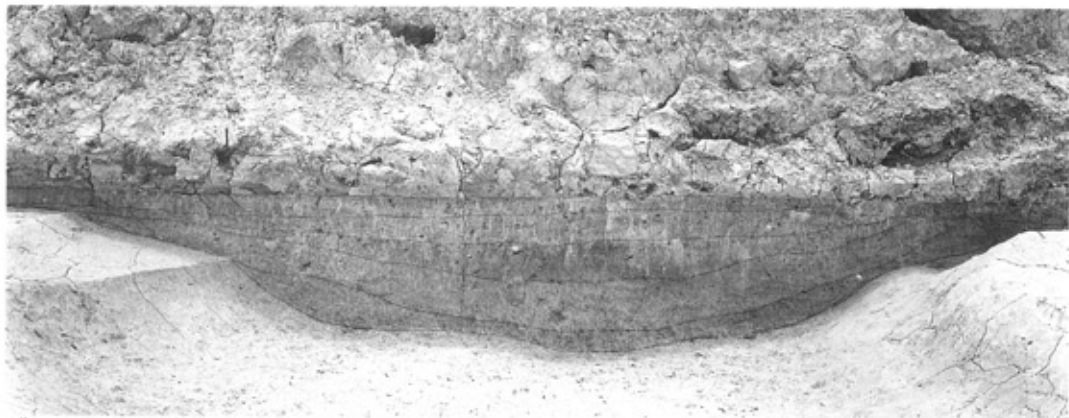
調査地遠景(南西から)



調査区遺構全景(東から)



方形周溝墓1(北西から)



溝SD3南壁土層(北から)



土坑SK18 遺物出土状況(東から)



土坑SK4(北東から)

西 国 分 II 遺 跡

株式会社ゴトーキン店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要

1993年12月

編集 財団法人 和歌山県文化財センター
発行
印刷 西岡総合印刷株式会社
